中国と司教任命について暫定合意

目的は教会の自由と福音宣教

バチカン

バチカン・ニュース（日本語電子版）が九月二十二日、バチカン（ローマ教皇庁）と中国が北京で会談、その中で双方が、司教の任命をめぐる暫定合意に署名したと報じた。この合意は、両者の段階的な相互の歩み寄りを経て、中国国民、世界平和への貢献を願い行われた、という。

バチカンと中国間で、カトリック教会についての共通関心をめぐり続けられてきた交渉で、北京で二十二日開かれたバチカンのアントワン・カミレーリ外務局次長と、中国の王超・外交部副部長による会談の中で、両代表が、司教の任命をめぐる暫定合意書に署名した。

バチカン・ニュースは、暫定合意が、長い慎重な交渉を経た、段階的な双方の歩み寄りの成果によるもので、その具体化については定期的に評価を行うことが予定されている、としている。

合意書は、教会の活動にとって大きな影響を及ぼす司教任命問題を扱っており、双方レベルでのより大きな協力のための条件を形作るものとなる。

バチカン・ニュースは、この合意が当局の豊かで先見性ある対話プロセスの発展に寄与し、中国のカトリック教会の活動と中国国民、そして世界平和に貢献するよう、双方の期待が表された、としている。

双方の折衝について、中国共産党系メディアの環球時報（英語版＝グローバル・タイムズ）は十九日付で、バチカンが九月末にも中国に代表団を送ると報じた。長年の対立案件である司教任命権に関する問題を協議し、交渉が順調に進めば合意文書に署名するとの見方を伝えていた。バチカン側の予測情報は公式には流れなかった。

教皇は、中国における福音宣教を支援するために、これまで教皇の認可を得ずに叙階された司教から八人を、教会の完全な交わりの中にあるものとして承認した。このうち一人は、昨年亡くなっているが、生前、聖座との和解の意志を表明していた。

教皇は、この選択により、過去の傷を克服し、中国のすべてのカトリック信者との完全な交わりを実現するための、新しい道程が開かれることを要望した。

そして、中国のカトリック共同体に、福音を新たに告げるために、より兄弟愛に満ちた協力を生き、教会を通してイエス・キリストと、御父の救しと救いの愛を証しするよう招いた。

バチカン国務長官ピエトロ・パロリン枢機卿は九月二十二日、教皇フランシスコは中国のカトリック共同体に和解の努力を託されている、として司教任命をめぐる暫定合意について次のように声明を発表した。

「バチカンと中国間で署名された司教任命をめぐる暫定合意は、大きな意味を持つ。それは特に中国のカトリック教会の活動や、バチカンと中国との対話のためはもとより、国際レベルで多くの緊張が見られる今日、世界平和の基礎づくりのためにも重要なもの」

「バチカンの目的は司牧的なもので、地方教会がより大きな自由、自主性、組織の状態を享受し、福音宣教の使命に取り組み、人間と社会の統合的発展に寄与できるように助けること」

「今初めて、中国のすべての司教たちは、教皇との一致の中にある。教皇フランシスコは、その先任の教皇たちと同様、特別な関心と配慮をもって中国の人々を見つめている。ここには一致が必要であり、信頼と新たな飛躍が必要。そして、ペトロの後継者と彼らの国の当局から認められた、良い司牧者たちが必要。合意はこうした目的から生まれた。この合意が、皆の協力のもと、このプロセスを助けることができるよう期待しよう」

「中国のカトリック共同体、司教、司祭、修道者、そして信徒の皆さんに、教皇は、過去と現在の無理解を克服する助けとなる具体的態度をもって、兄弟間の真の和解の精神を生きるようにと、特別な努力を託している。こうしてこそ、中国のカトリック信者たちは、自分たちの信仰を証しし、祖国への純真な愛を生き、すべての民族との対話と平和の推進のために自らを開くことができる」（CJC）

キリスト教「地下教会」を閉鎖

中国

中国の首都・北京朝陽区民政局は、同国で最大規模のプロテスタントの「地下教会」が認可なしで活動していたとして、シオン（錫安）教会の閉鎖に踏み切った。同教会は、毎週最大千五百人が礼拝に通っていた。米国に本部を置く『対華援助協会』やAFP通信などが報じた。

同教会は、北京北部のオフィスビルの三階にある。金明日牧師の話によると、九月九日午後の礼拝後、当局者約七十人が教会に踏み込んだという。

民政局は「捜査の結果、北京シオン教会は未登録で、社会組織の名目で不認可のまま活動を行っていたことが判明した」と発表した。

翌十日、現場では、少なくとも十数台の警察車両、制服姿もしくは私服姿の当局者数十人が、礼拝に使用されていた建物に入ろうとしたものの阻まれ、当局者が三階は封鎖されていると述べた。（CJC）

教皇がバルト三国訪問

希望のメッセージ伝える

教皇フランシスコは、九月二十二日から四日間の日程で、リトアニア、ラトビア、エストニアの、バルト三国を司牧訪問に出発した。

バチカン・ニュースによると、教皇は出発を前に、訪問先三カ国の国民に、ビデオを通しメッセージを送った。

この中で教皇は、カトリック教会の司牧者として訪れながらも、これらの国々のすべての人々を抱擁し、平和と善意、未来への希望のメッセージを伝えたいと述べている。

教皇はこの訪問が、バルト三国の最初の独立宣言から百周年を祝う年と重なることに触れながら、現在の自由を可能とした過去の人々の犠牲を想起した。

自由とは、絶え間なく守り、新世代に伝えられるべき、貴重な遺産であると述べた教皇は、暴力と迫害の暗い時代も、自由のともし火は消えることなく、神から与えられたすべての人の尊厳が尊重され、正義と兄弟愛の社会を築くために皆が協力する、未来への希望を掻き立ててきたと強調した。

二十二日朝、ローマ・フィウミチーノ空港を特別機で出発した教皇は、現地時間同日昼前、最初の訪問国リトアニアの首都ヴィリニュスに到着した。

ヴィリニュス国際空港で、教皇はダリア・グリボウスカイテ大統領に迎えられ、民族衣装の子どもたちから花束を受け取った。

空港で歓迎式に臨まれた教皇は、大統領の表敬訪問と要人との会見のため、ヴィリニュス市内の大統領官邸へと向かった。

教皇は、二十五日までのバルト三国訪問中、宿泊先をヴィリニュスに定め、同地を基点に各国・各地を訪問する。

バルト三国訪問二日目の二十三日（日）、教皇は、リトアニア第二の都市、カウナスに向かい、ネムナスとネリスの両川が合流するサンタコス公園で、ミサを捧げた。

会場にはおよそ十万人の信者が集い、オーケストラやコーラスの調べがミサを彩った。

教皇は、キリスト者の人生には、常に十字架の時があり、その苦しみには終わりがないように見える時もあると述べつつ、占領や強制連行、密告や裏切りの只中に置かれた不安と苦悩、シベリアやゲットーという言葉に触れる時の戦慄を体験した、リトアニアの人々の歴史を振り返った。

教皇は、「イエスは今日、誰をわたしたちの真ん中に立たせるでしょうか。誰がわたしたちの間で最も小さき者、最も貧しい人たちでしょうか。独立宣言百年において、わたしたちが受け入れるべき人々は誰でしょうか」と問い、地域における少数民族や、職を求め移民せざるを得なかった人々、孤立したお年寄り、人生の意味を見いだせない若者たちなどの存在を示した。

教皇は「外に向かう教会」を強調。自分の何かを失うように感じて、社会の片隅の人々に尽くすことを恐れるようではいけないと、人々を励ました。（CJC）

中国のキリスト教弾圧

牧師300人以上が批判

米ニューヨークに本拠を置く中国政府に批判的なメディア『エポック・タイムズ』の日本語版『大紀元』は、最近、中国共産党政権が「家庭教会」への取り締まりを強めている、と九月十一日報じた。

十字架の強制撤去、信仰強制放棄などが行われ、これに対して中国各地の二十九人の家庭教会の牧師と長老が九月一日、実名でネットで当局の弾圧を非難する声明を出した。署名数は十日現在、三百人以上に増えているという。

声明によると、「改正宗教事務条例」が施行された二〇一八年二月以降、地方政府はキリスト教会を抑圧し、「その横暴ぶりは、文化大革命以来」と批判している。

河南省では、今年二月から当局が公認しない「家庭教会」（地下教会）の取り締まりが始まったが、最近になってキリスト教全体への弾圧がエスカレートしている。

香港紙『明報』は、河南省永城市のある牧師の話を引用し、河南省で今は十字架が全て消え、公認の「三自教会」でも十字架がすべて撤去されたと報じた。河南省で四千カ所以上の教会の十字架が撤去されたと牧師は推測している。

米国在住の中国出身の劉賠牧師は、このほど米公営放送『ボイス・オブ・アメリカ』（VOA）に対して、河南当局は地方キリスト教会の合併を計画していると語った。「恐らく三分の二の教会が閉鎖されるだろう」という。

河南だけでなく、北京、安徽、江西などでも、宗教抑圧事件が相次いでいる。「家庭教会」と「三自教会」の十字架などは、地方政府が「違法建築」として多数撤去している。

国務院が今年四月に公表した「宗教政策白書」によると、キリスト教信者の人口はおよそ三千八百万人に達している。二〇一〇年発表された二千三百万人より65％増えた。（CJC）

カイロで考えたイスラム ⑨

◆連載◆

在カイロ・ジャーナリスト　鈴木真吉

ワッハーブ派のサウジアラビア

イスラム教は正統カリフ時代からウマイヤ朝を経て、アッバース朝に到る。渥美堅持氏は著書『イスラム基礎講座』で、この六百二十六年間に、預言者ムハンマドが受けた啓示の書であるコーランを中心に信仰した素朴な時代から、ペルシャ文明やビザンチン文明などとの接触により、イスラム教の解釈をめぐって分裂も含む多様な見解が出てくるようになった、と指摘している。

預言者ムハンマドの死後、教徒たちは預言者の生前の言行を集め、法解釈するようになった。この言行録が「ハディース」で、コーランに次ぐ第二の法源とした。

しかし、支配が異民族にも拡大すると、イスラム教が裁く問題はコーランとハディースだけでは対応できなくなる。そこで、数人の法学者が協議し結論を出すことが制度化され、その結論が判例となり「イジュマー」と称する第三の法源となった。

しかしこの制度は、複数の法学者がいないと成立しないので、地方や辺境では非現実的だった。そこで、法学者一人でも、法学者がいない場合はイスラム教に詳しい者（商人、学者、詩人など）による類推解釈が行われるようになる。彼らは過去の事例から推測して判決を下し、「キャース（類推）」と呼ばれた。

青柳かおる氏はキャースを三段論法だという。例えば、コーランではワインの禁止が明記されているが、他の酒はどうなのかという問題には、ワインが禁止なのは酩酊作用があるからだとの理由から、他の酒も全て禁止と類推する。

以上の四種類を法源に法源論を確立したのが法学者シャーフィイー（七六七～八二〇）で、これ以降、イスラム法は原則として四つの法源から導き出されることになる。アッバース朝時代の八世紀半ばから九世紀半ばにかけてウラマー（イスラム法学者）層が形成され、法学派が形成された。

第一のハナフィー学派は、イラクのクーファを中心に存在した学派を継承したアブー・ハニーファ（六九九～七六七）が祖。地域的慣行や法学者の個人的見解に基づく判断を重視するのが特徴で、コーランとキャースを重視し、ハディースを尊重しなかった。ペルシャ系の学者で、実践的ではなく思索的理論的で、現実問題には柔軟に対処し、最も寛容で、近代的な学派とみなされている。

アッバース朝初期にアッバース家に公認され、オスマン帝国の公認学派でもあったことから、トルコやインド、中央アジアに広がり、イスラム教徒の約30％が属している。比較的女性の権利を尊重し、成年女性が、自身の意思によって婚姻契約を結ぶ権利を認め、他者が女性の意思に反して彼女を結婚させることを認めない。

ハナフィー派は、刑罰・制裁の適用でも寛容で、例えばイスラム法（シャリア）では、窃盗犯は両手両足を切断するが、両手は切断せず、再犯歴が三回以上の累犯犯罪者には、手足は切断せず投獄のみで、また、イスラム教からの背教は死刑だが、女性の場合には投獄のみとする。

第二は、メディナの法学者の家に生まれ、同地で裁判官として生涯を終えた、マーリキ・イブン・アナス（七〇九～七九五）を祖とする学派で、メッカとメディナを含むヒジャーズ地方の法学派から生まれた。二番目に大きく、イスラム教徒の約25％が属している。

マーリキ学派が他の学派と著しく異なる点は、個人的意見を認めず、ハディースを最も重視し、地域的な慣行やコーランの典拠を重視すること。スンナ（慣行）には、ハディースに収録されているものだけでなく、正統カリフの四人、特にウマルの制定した法、イジュマー（ウラマーたちの総意、キャース（類推）、ウルフ（地方の風習）も含ませている。さらに、聖地マディーナ（メディナ）の改革思想サラフの「生きたスンナ」によってこそ、伝承されたハディースが実証されるとする。伝統的で実践的な派ともされ、現在はエジプトのアズハル大学を最大の拠点としてエジプト、アルジェリアなどの北アフリカ諸国や、サハラ以南のアフリカ、アンダルス（イベリア半島）などにも広まっている。

第三は、パレスチナのガザに生まれた、マーリキの弟子ムハンマド・イブン・イドリース・アッシャーフィイー（七六七～八二〇）を祖とする学派で、メディナの慣行を重視するマーリキ学派とイラクの論理的なハナフィー学派を総合したとされる。

シャーフィイー学派は個人の意見を排し、スンナ（慣行）はムハンマドのハディースから得られる慣行に限るとした。彼においてイジュマーとは、広くある一時代の学者全部の一致した意見である。彼は三段論法に基づき、論理的に不明確であったキャースの概念を明確化、イスラム法の解釈学を完成させた。

ハナフィー学派やマーリキ学派に比べ啓示的法源を重視し、地域の慣習に依拠する割合が低い。セルジュク朝の庇護を受けたため、一時はイラン高原全域からイラク、アナトリア、シリア、エジプトまで拡大し、アラビア半島南部でも広まった。特にニザーミーヤ学院では、アシュアリー派神学と、シャーフィイー法学派が必須教科であったことから、十一世紀以降、イマーム・アル＝ハラマインやガザーリーなどの高名な思想家や法学者、ウラマー、知識人を多数輩出した。しかし、十五世紀になると、ハナフィー派を採用したオスマン帝国やシーア派の十二イマーム派を奉じたサファビー朝が台頭し、中東地域での勢力は後退する。現在は東南アジアやアフリカ大陸東部、中央アジアに広まっている。

この派は、預言者時代のイスラム教世界を理想とし、回帰運動の源流と言われている。十一世紀から、シリア、パレスチナを中心に最盛期を迎えたが、以降、勢力は衰退し、十八世紀にアラビア半島に興ったワッハーブ派に受容され、サウジアラビアの法学派になった。ワッハーブ派とは、ハンバル派の学者イブン・タイミーヤ（一二六三～一三二八）の影響を受けたアラビア半島のアル・ワッハーブ（一七〇三～一七九一）の思想で、サウド家が軍事的に支援し、メッカやメディナでも主な法学派となった。渥美氏は、ワッハーブ派は預言者時代を彷彿させ、「純正アラビアのイスラム教」といえると指摘している。

同志社大学神学部出身の佐藤優氏によると、イスラム過激派の95％以上はハンバル学派の出身で、同派は、世の中が一番正しかったのはムハンマド預言者が生きていた六世紀頃だと主張しているという。

第四は、イラクのバグダッド生まれのイブン・ハンバル（七八〇～八五五）を祖とする学派で、個人的見解に依拠するハナフィー学派を批判し、コーランとハディースのみを法源にすべきだと主張した。ハンバル法学は非常に厳格・保守的で、特に教義や儀式に関する問題を扱う。二つの法源以外を認めないことから、アッバース朝第七・第八カリフ当時、投獄される事件が起きている。

イスラム法の4つの法源

カトリック聖職者の性虐待

米国各州で特別捜査

米ペンシルベニア州のカトリック神父三百人以上が少年少女に性的虐待し、隠蔽していたとの調査報告書発表から三週間余り。ニューヨークのバーバラ・アンダーウッド州司法長官は九月六日、州内に八カ所あるカトリック教区全ての司教に召喚状を発行した。司法長官には大陪審を召集する権限がないため、州内各地区の検事局長らと協力し、同様の犯罪があれば訴追したいとしている。同司法長官は「ニューヨーク州内に被害者がいるのであれば、彼らの声も届けられるべき」と述べた。ニューヨーク・タイムズ紙が報じた。

ニュージャージー州では聖職者による性犯罪の特別捜査班を組織。同班には大陪審を通して召喚状を発行する権限が与えられている。

さらにイリノイ、ミズーリ、ネブラスカ、ニューメキシコなど各州の司法長官も、州内で同様の犯罪がないか捜査すると表明。聖職者のほとんどは協力を表明しているという。（CJC）

聖職者の性的虐待を65年間隠蔽

オランダ

世界各地でカトリック教会をめぐる不祥事が相次ぐ中、AFP通信によると、九月十五日のオランダ日刊紙『NRC・ハンデルスブラット』が、国内のカトリック教会について一九四五年から六十五年間、聖職者らによる子どもへの性的虐待事実の隠ぺいに上位聖職者の半数以上が関与していたと伝えた。

オランダ人枢機卿、司教、補佐司教三十九人のうち二十人が、聖職者らによる性的虐待の事実を隠ぺいしていた。このため、同じ聖職者らが性的虐待を続け、さらに多くの被害者を生む結果になったという。

オランダ・カトリック教会広報のダフネ・ファンローゼンダール氏はAFP通信に、報道の一部は事実と認めてもよいと述べた上で、性的虐待を指摘された聖職者の多くは既に死去しており、全ての事件は時効が成立している、と付け加えた。現在も存命している聖職者たちはコメントを拒否しているという。

一方、フランスでも新たに聖職者による子どもへの性的虐待が明らかになった。

仏中部カンタルのカトリック教会の神父（64）が、三歳から十七歳までの兄弟四人に性的虐待を加えたとして、兄弟の家族に告訴された。兄弟の弁護士が十五日、明らかにした。兄弟は教会の聖歌隊に所属していたという。虐待があった時期は不明。（CJC）

《 サントリー 》

《 アサヒ 》

《 コスモフーズ 》

—ご紹介下さい—

ちょっとしたスペースがあれば設置できます。（場所の提供だけで…）
情報をお待ちしております。まずは当社へお電話を！

ご紹介して頂いた方には（北海道～九州）
ビッグ紹介料進呈！！

株式会社 コスモフーズ
〒331-0804さいたま市北区土呂町 1-46-9
TEL 048-651-4273
FAX 048-651-4142 本社、自販機紹介担当まで